



TITLE:

日光利用法について

AUTHOR(S):

CITATION:

日光利用法について. 天界 1940, 20(228): 167-167

ISSUE DATE:

1940-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167984>

RIGHT:

に觀測する場合、像が極めて小さく微光なので、海王星の場合には極めて困難な事になる。然し、過去に於て分光器がリク天文臺で此の問題にうまく應用され、其の結果、海王星は16時間よりやゝ短時間の周期で正順に自轉して居ることが譯つた。尙ほ此の値は理論に依つて推定されたものと充分一致を見て居るのである。斯くて、海王星は(天王星を除けば)他の凡ての遊星と同様、同方向に自轉して居ると思はれ、唯一の衛星が既知の逆行回轉をして居るとの見解がある事實は、勿論太陽系の起原に關する如何なる理論にも、重大な役割を演ずるものである。(佐登兒譯)

日光利用法について

理學博士 平山清次氏曰く：

日光利用法で、唯一つ都合の悪い點は、汽車の發着時刻との喰違ひである。國際列車が國內を縦横に貫く大陸諸國、又は米國の如く汽車の連絡が非常に複雑で、容易に發着時刻を變へられぬ所では、時計を一度に一時間進めるのは容易ではない。それを何とか出来ないかといふに、一度に一時間進める代りに、日に一分づゝ六十日間(例へば、三月1日から四月29日まで)時を進めることにすれば、少しも無理なことはなくなる。この方法は、未だどこ國にも實行されてゐないが、確かに良い方法であるから、日本が率先して、それを採用すべきである。更に、また、一時間の代りに一時間半、即ち、日に一分つつ、九十日間、時計を進めることにすれば、一層効果的である。秋になつて、時計を遅らす場合は、日に一分づつ六十日間、或は、九十日間、遅らせばよいので、少しも面倒なことはない。自然科學等の純學術的な方面に、日光利用法の如き人工的の時を用ひることは不適當である。然し、それには現に天文學に於て行はれてゐる世界時といふ標準時がある。純學術的なこと、及び國際通信などには、世界時を用ひるのがよい。(讀賣より)

山本一清博士曰く：

“日光利用法”は、サムマ・タイムばかりでない。尙ほ其のほか“標準時變更法”といふ新方法がある。平山博士たるもの、之れを知らぬことはあるまい。知つて居らるゝ以上、之れについての御意見が伺ひたいものである。——毎日一分づつ60日間(或は90日間)も時計の針をづらせる技術はむづかしく無いが、づらした結果の社會(天文家も、氣象學者も、統計學者も、交通や通信の關係者も、皆、社會の一部である)の混亂は堪つたものでない。標準時や世界時との間の換算が面倒で、一種の“換算曆”といふものを天文臺は作製しなければならぬ。平山博士のやうな計算術の専門家は、換算に面倒は感ぜられぬだらう。(現に同氏はメートル法に反對で、尺貫法の主張者なのだから。)しかし、社會の人は換算を最も嫌ふのだ。そのため、メートル法だつて未だに國內に徹底しないのだから……